

改教時報

第三十號

明治三十三年七月一日 發行

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神の結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、政教問題を研究して、政府をして公認教制度を立てしむる事。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して、善良なる家庭を形作りしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勸絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

目次

社説

● 危險なる自由思想

論説

● 將來の宗教界

● 懷疑必ずしも不可ならず

● 東北大學の設立

在法科大學

嶋川 行道

永井 濤江

百目木 智理

會報

● 越中 越中佛教徒同盟會

● 加賀 北陸佛教徒同盟會

● 尾張 尾張佛教徒同盟會

● 三河 三河佛教徒同盟會

社會

● 佛教慈善會財團 ● 各宗管長會議 ● 大谷光尊

伯の陸爵運動 ● 新女大學 ● 新政黨 ● 新聞紙の

品位 ● 大學高等學校増設 ● 瓜生會發會式狀況

雜錄

● 基督教の傳道事業

信塚

● 靜觀錄 (十) 宗教心は最健全なる常識に外ならず

文學士 近角 常觀

令音

● 尾張の慈善家岩井利右衛門翁 (完)

文學士 本多 藤里

政 教 時 報

危険なる自由思想

唯々怪聞は續々吾人の耳に達す曰く東本願寺は新政黨と提携せられたり、曰く西本願寺は俄かに監獄問題の沸騰せる時に於て自由黨と密約する所あり、俄かに其説を反駁して、然し爾來提携の交益々密を加ふと前者を證明するものは新政黨員か京都に於ける佛教大會の状況を以て其議論の料とし、後者を確證するものは板垣伯か獨り西本願寺を訪ひて、東本願寺を訪はざることを以てす、由來世評は容易に信すべからず予輩は東西本願寺か斯の如き愚策を取らざるを信して疑はず、萬一此の如き提携密約等の存するべからず、實に宗教の神聖を冒瀆するものとして排斥せざるべからず、勿論予輩は宗教家を右せらるるか如きは宗教家として決して取らざる所なり、寧ろ宗教家は須らく政治家の宗教に對する妄見を打破せし、妄見の爲に利用せらるるべからず、之と同時に徒らに世間の潮流に動かさるるべからず、須らく墮落せる世間の空論を打破すへし、近來各宗管長會議に於て西本願寺法主か公認教反對の意見を唱へられたり、とて諸新聞紙は大に之を吹聴し之を德惠し宗教家を退却せしめんとするに汲々たり、予輩は西本願寺法主は決して公認教に反對せる人に非ざるを信す何となれば

近來各宗管長會議に於て決議せし佛教法案を以て政府に交渉せんか爲各宗と共に其宗派より委員を東京せられしを以ても知るべければなり然れども西本願寺の主義か動すれば此無宗教者連の徳徳に誘はれて動かんとするの徴あるを見るは頗る遺憾とする所なり、思ふに公認教制度の確立は佛教各宗の輿論なるべし又世間に在ても法治國の如何を解し秩序的の概念あるものは皆公認教制度に賛成せり、他なし公認教制度は權利ある者をして其權利を確めしめんとするものなればなり、特權を受くべき者をして特權を受けしめんとする者なればなり、佛教者が公認教制度に運動するは、この權利を確實にし、此特權を侵害せられざらんが爲なり、是れ法治國の人民が勉むべきの道徳なり、秩序を解するもの、運動なり、何すれど戰々競々するの要あらむ、實に公明正大堂々として進行すべき也然れども近來諸新聞雜誌等にして、往々公認教制度を以て鄙屈なる者の如く、又政教と混同するもの、如く思ひ、今にも大禍亂の起らん様に言ひ觸らすは實に愚の至りといふべし蓋し政教混同なるものは之を史上の事實に徴するに基督教と回々教とを以て尤も甚だしとす、近來に至りても尙其弊に堪えざるものは西洋基督教國なり、故に西洋人中には政教混同を恐れ之か爲に論じ之か爲に筆を採りたるもの頗る多きの結果我國に在ても西洋の事情に通ずる學者は却て近來の政教問題の起れるを見、大混亂の來りたる如く想像すれども、是れ外に明にして内に暗きの致す所なり、佛教徒が如何に公認教制度を確立したりとて決して、政教混同の恐なきことは我國史上より保證し得べき所あり、若し杞憂家ありて政教混同の弊を患へば宜しく政治と基督教との關係を考ふべし、是れ

寧ろ價值ある研究なり、然れども公認教を以て徳川時代の朱印制度の如く思へるものに對しては予輩は斷乎として飽迄其非を鳴らざるべからず、讀者予輩の意ある所を諒して可あり、予輩は現時の佛教者間に大に憂ふべき潮流あるを見出せり、一は乃ち頗る排外思想と一は乃ち危険なる自由思想是なり、前者は教育少なき社會に多くして後者は教育あるの社會に多し、排外思想の取るべからざるは、苟も教育あるもの承認する所なれども、自由思想の濫用より佛教者百年の大計を誤らしめんとするものあるに至りては、日本現時の佛教社會中又一人の之をいふものあし、予輩は此に於て教育ある佛教社會に一大痛棒を加へんと欲す、抑も自由なるものは万人の共に望む所にして而も完全なる自由に至りては決して人世に於て望むべからざるなり、否望むべからざるのみならず、自由の制限は人生に於て必要なり、何となれば人生の秩序は階級によりて得べく、貧富の差異は文化發達の大要素なればなり、只此階級や此差異や人間の能力勉強の如何により、長時期に於ける効績の如何によりて決せらるべき自由あるを要す、文明時代の階級制度が野蠻時代の階級制度に異る所は此自由の有無によるなり、故に文明時代の階級制度は自由を以て基礎とす、自由あり、始めて階級制度を完成すべきなり、此の如く自由は文明秩序の基礎たるに由り、世人の自由を慕ふや頗る切なるもの自然の勢なり、於此薄弱なる頭腦を有するものは、平和か人生の最大目的なることを忘れ、平和の基礎たるべき自由を以て人間の最大目的なるが如く思ひ、此に極端なる自由主義を生ずるなり、虚無黨の起るも自由に心酔したる結果なり、社會黨の起るも自由

に心酔したるの結果なり、佛蘭西革命は實に此自由主義の誤謬によりて起り、輕薄なる佛蘭西人民は今尙此思想の爲に確立する能はざるなり、要するに薄弱なる頭腦には誤謬的自由思想の侵入し易きものなり、一應の教育を受けたるものには由思想を應用したるものは普國の英傑ビスマルクあるのみ、思ひ起す一千八百六十年の頃に當り普國の輿論沸騰して自由を唱道し、議院はウヰリヤム一世帝の軍制改革に反對するに當り、彼はセントペーテルブルグの公使より一躍して宰相の位に昇り、彼の舉動は實に頑冥不靈なる一木強漢の如くありしことを、全國中彼に同情を表するものは殆ど帝王と其内閣員のみと云ふて可なり、當時民間自由を唱導せる自稱文明家は喧々囂々たる輿論の同情を得たりと雖も、蓋し比公の腦中には新鮮なる秩序的空氣疏通し、ランゲの大史書によりて研き上げたたる其深淵なる智識は到底薄弱なる自由思想を許さず、故に彼が執權の當初にありて彼は始終彼等の嘲罵中に葬られたりと雖も確信あるものは終に大業をなす、健全なる獨乙帝國は遂に彼の手によりて建てられたるに非ずや、而して自由主義の濫用を抑制する能はざりし、那翁第三世はセダンの一敗と共に悲むべき末路に上り、余輩は近來我國に於て行はるる自由思想は、之を宗教界に見るも之を國家に見るも殆ど今世紀の中葉に於て歐洲大陸を混亂せしめたるものと同様にして同時に我國の政治家又は宗教家にして未だ一の比公なきを悲むものあり、余輩は近時宗門内に於ける教育ある社會か此自由思想の誤謬に陥りて、而も筆に口に佛教者を誤らしむるものあるを慨嘆

徒らに固冥暗にして時勢に暗く、爲めに社會に容れられ難く、遂に佛敎の眞價を顯さず、其職責を完ふせずして終る者

第一、僧俗の關係は、之を從前より一雙親密ならしむべきことあり、故に佛敎をして隆盛ならしむるは、僧俗の關係を第一と爲すべし

するなり、殊に西木願寺か近來に於て公認敎主義に對して、曖昧なる態度を取らざるは又此少數の學者教育者の危險なる自由主義の爲めに誤られたるものなるを信するなり、由來學者教育家たるもの實務の點に於て信すべからざるもの多し

論 說

將來の宗教界

從來我國は、佛敎國と云はれ、日本の宗教と云へば、即佛敎なりと云ひ、他に神敎なるものもありと雖も、誰も日本の宗教は、神敎なりと云ふ者なく、又耶蘇敎も、外國と交通開

川 行 道

出入するに至り、佛敎へ所屬信者の出入するに勝るもの殆ど皆お然り、又此宗教の勢力は漸く二つの多國會議に於て、宗教問題を議論するに當りても、漸く三の多數を以て佛敎の勝利に歸したりと云はるは、實に驚くべき奇異の現象にあらざるや、佛敎國と云はる、國の立法議會に於て、耶蘇敎に左袒する者將に其尖に居らんとすは吾々の

懷疑必すしも不可ならず

永井 濤江

今この宗教家懷疑の二字を嫌ふと毛蟲よりも甚しく懷疑とさへ云へば一種の不徳と斷じ去りて擯斥假さず殆んど相齒するをさへ好まざるの風あり余は怪しむ懷疑は爾かく擯斥憎惡せざるへからざるものなるか懷疑にも亦類多し輕佻の懷疑あり慎重の懷疑あり前者の弊害は多言を要せざれども后者に至りては寧ろ儀式的僞信蠱惑の迷信に勝るものなきか。

不孝は普通人情の惡む所然るを故らに子たるものは必らず父母を養ふべきの義務ありや否やを問ひ議論の成行如何によりては不孝者をも辨護せんと欲するものありとせば其害や實に測るへからざらんとす。

曾嫡の醜事たるは普通人情の認むる所然るを強ひて何故に其不徳なるやを問ひ醜業者と遊蕩兒とに口實を與ふるものあらは其議論は多少の理あるや否やに關せず其懷疑や實に物嗜さの甚しきものにして之が爲に害毒を世に及ぼすと少からず。

此の如きは余が所謂輕佻の懷疑にして世人と共に極力擯斥せんと欲する所なり。

然れども世に慎重贊すへきの懷疑なきにあらざらん此慎重の懷疑に由て世を導き人を救ひ瞋味を啓き誤謬を匡したる例枚舉に暇あらずコロンパスは懷疑の人なり嘗て世界の状況に付て疑を懷き衆人の嗤笑をも意とせずして此を決せんか爲に企てたる航海が圖らす新大陸の發見となり之によりて世界の進運に非常の影響を與へたり、コペルニカスは懷疑の人なり彼は地

與へざるへからず、而して助力を與ふるは信徒の當然負擔する義務ありとす、
(未完)

球中心説に就て深く自ら疑ふ所あり苦心焦慮此疑を解かんとして研究を積むと多年終に地球運行説を發明し萬世不易の真理を後代に傳ふると得たり、マルチンルーテルは懷疑の人も渠は疑ひけらく何故に腐敗の極點に達したる法王權に絕對的服従をなさざるへからざるか何故に膏血を絞りて其驕奢の資に供せざるへからざるか此疑團は發して九十五個條の疑難とあり法王破門狀の燒棄と断然法王權の羈絆を脱して此に基督新教の勃興を視るに至れり。

釋迦牟尼佛陀はも懷疑の人なり其城門に於て認めたる生老病死の相は渠の心に一大疑團を懷かしむ曰く人生果して樂しきか王公果して貴きか人誰か生死に移されざるを得る若し生死を免るへからずとせば之に處するの道なきや此等の疑團一たひ胸裏に湧きてより金殿玉樓も針の筵に異らす無上の榮華最愛の後妃毫も心の憂を慰するに足らず乃ち遁れて山林に入り道を梵士に問ふ梵士の答ふる所千言一律古傳の謬説を繰り返へすに過ぎず徒らに疑惑を増すのみにして毫も益する所なし乃ち去りて沈思默座自之か解釋に苦むと十餘年一朝涅槃の妙理を悟り得て疑雲始めて拂ふを得たり其自得する所を説て、一切衆生の同病者を救ふ一代の行化五十餘年の説法畢竟當初の懷疑の賜ならざるはなし。

懷疑は革命の胚種なりコペルニカスの科學界に於けるマルチンルーテルの基督教界に於ける釋迦牟尼佛陀の印度宗教界に於ける皆舊時代の思想に向て懷疑の地位に立ち其固陋を破り其迷妄を啓き將に化石了らんとする舊思想界に新らしき生命と光明とを與へざるはあらず。

物久しきを經れば停滯し停滯すれば則ち腐敗し腐敗は此に外部の修飾を余義なくせしむ腐敗愈甚しければ修飾愈甚し修飾

東北大學の設立に就きて

百目木智理

愈甚しくして益腐敗を増進せしむ戒む可きは此に在り。顧ふに今日の宗教が虚儀虚禮を囂々し宗規教律を嚴にして纒かに其宗教の形骸を維持せんとし教義信條を確立して以て將に潰へなんどする宗教を統一せんとするか如きは萬宗教末尾の努力として視るへからざるか否か。

今時に當りて意義なき虚禮了解すへからざる教義に向て疑感を懷くは免るへからざるの勢なり若し之を威壓し了せんとするか恰も大河の決に逆ふか如く會以て之を激せんのみ余輩宗教の爲めに謀るに一も二もなく懷疑を不徳と看做し飽迄之を抑壓せんとするか如きは策の得たるものにあらず慎重の懷疑は之を容るゝの餘裕なかるべからず而して其をして満足を得せしむるに務めざるへからず偏狹今の宗教の如くんば終に新思想の敵たるを覺悟せざるへからざらん。

教育は國家的にして地方的のものならざること敢て論を俟たざるなり、而も地方的感情によりて支配せらるゝは、余輩の屢々實驗する所、國家教育の上に弊害を貽すはより甚しきはなからむ、今の當局者は薩の出身にあらずれば、多く長の出身に於て久しく天下に跋扈せり、故に九州と東北とを獨り地理上に於て關山千里相遠かるのみならず、其特典に浴する厚薄の度、豈嘗て霄壤の差あらむや、東北の地今日まで特典と稱すべきものは、僅に高等學校の設置に止る、若し他に特典とすべきものを求めんか、野蒜築港に補助を受けたるに過ぎず、鐵道布設の如き交通機關として、國家の經營上焦眉の急を要するにも關せず、奥羽線の完成を期するに至

ては未だ幾多の歲月を費さるべからず、當局者の東北に對する何ぞ冷淡にして不親切の甚しきや。

蓋し九州人は維新に於ける戰勝者として常に東北を蔑視し、東北人をして悉く政治上以外に放逐し、一切政權に參與せしめず、獨り揚々台閣に踞りしつゝ、あるとせば三十年、東北人士は失意の境に立つも依然として其氣力衰へず、藩閥政府打撃に極力傾注せり、曾て板垣伯の自由黨を組織するに當り、平素の主義意氣相合するものあり、於是乎東北人士は翕然として趨りて之に投じ、益々藩閥政府攻撃の氣節を高めぬ、其後自由黨漸く軟化し當時の政府と手を握るの醜態を來し、墮落の深淵に陥るや、果然東北の志士は蹶起袖を拂うて自由黨を棄て、進歩派に入り、毫も藩閥政府の爲め膝を屈せず、益々其鋒を鋭にし、其墨を城を攻撃の砲聲を絶たざりき、東北の青年子弟にして少しく氣概あるものは、官海に游泳し藩閥政府の粟を食むを屑しとせず、自ら民間にありて天下に向ひ大聲を呼號せんとす、今日都下の新聞記者中東北出身の人士比較的多き所以のものは以て人心の潮流如何を察すべし、由來九州と東北とは互に感情相衝突して其狀恰も犬猿も管ならずと云ふべし。

今や復た東北と九州とは大學の増設に就て頓衝突せざるべからざるに至る、乃ち文部省は本年度に於て、大學増設の方針を立て豫算を編製して大藏省に提出したりと云ふ、無爲無能を以て目せらるゝ文部省、聊か世の誹を免るゝを得むか、然れども何れの地に設置せらるゝや、是れ刻下の大問題なり、余輩の云ふ迄もなく、そは九州の地に確定せらるゝなり、從來當局者の東北に對する態度を以て之を見むか、此事ある敢て怪

ひに足らず、今日、東北、豈昔時の東北を以て見るべけんや、交通の不便はこれあり、雖も、教育上の進歩、容易に九州に歴せらるゝものにあらず、大学の豫備たる仙臺と熊本の本の高等學校現在入學者の總數を比較するに、九州の人口殆ど東北に倍するにも拘らず、仙臺の高等學校は遙に熊本より優勢を占むると云ふ、東北の文運は幾々乎として進み開化の學園は鬱鬱たる美花を開かむとす、今日の東北、九州に對して多く遜色あるを見ず、余輩元より進歩の點に於て、東北の九州に一籌を輸するを知らざるにあらざる、而も進歩と云ひ進歩と云ふ其差五十歩百歩に過ぎざるなり、教育を以て文化開拓の要義とせば、必ずや順序として東北に大學を設くるの至當にして甚た公平なるを信ず、國家人材均等より立論するに、東北に大學を設くるは、皆期せずして同情を表するに於て、心を仙臺に設くること、就き一の競走者なく東北文化の中を、開く、宮城縣知事は、去月十九日急に臨時縣會を召集し、滿場一致を以て、大學設立せらるゝこと、三十五萬圓を國庫に寄附するの議案を可決せりと云ふ、地方有志者の教育上は、狂奔熱注すること夫日如此し、當局者は猶冷眼視し得るか、知らず當年の覇氣を有する權山文相、猶未だ地方的感情を脱する能はざるか、更に一の報道あり、文部省は二大學を設けて東北にも之を置かむとす、余輩は双手を擧げて大に贊する所、然れども二大學の増設は政府の豫算果して之を容るゝや否や、恐くは當局者か或派に左右せられ、かゝる窮策を編み出したるにあらざるなきか果して新紙は其間の消息を洩して曰く。

九州東北二大學新設の計畫に就て聞く處に依れば既に其豫算概算の要求書は大藏省に回付せられたり、雖も元來開員の一致を経て計畫せられたるものにあらず、故に大藏省が肯定の結果或は財源不足の故を以て削減に決定するなきを保せず是れが爲め大藏文部の兩省は數回の押問答をなし五、六多少譲歩する處なきにあらざるべきも要するに文部省の計畫せる全部は到底大藏省の同意を得る能はざるは明瞭なり併して二大學の内一校だけ成立するに於て一時二大學を増設するの必要なく寧ろ京都大學の完備を期するを急務とするの意見を抱持せるものも少なからざるが故に假令大藏省の査定に係る一校だけの計畫と雖も、容易に四議の同意を得るべしと強硬する能はざる虞なり、殊に來年度の豫算には緊切止むを得ざるもの外一切の新事業を起さざる大方に決定しあれば、同間、文部大臣が反對黨策の爲算に編入したる空中樓閣なるや、知るべからざる云ふものあり。

越中

●礪波佛教徒全盟會 本部會頭久我侯爵を聘し去月十日日出町眞如院に於て茶話會を開きたりしが會場の莊飾等凡て行届き午前十時開會幹事遠藤誠一氏開會の辭を述べ次に大草惠

實氏は一場の談話を試みたり次に久我侯爵は將來の佛教は社會道義の根源となりて大に活動せざるべからず云々と懇篤なる談話あり次に乘杉氏は謝辭を述べて侯爵に答へ次に大矢代議士は會員を代表して一場の演説をなした次に大谷賢了氏も一場の演説をなしたり夫より茶話會等の配布あり互に胸襟を開いて佛教の將來を語り全十二時割愛して散會したり此日の參會者は郡中の有力者百餘名並に有志僧侶にして林郡書記は郡長代理として參會せられたりと云ふ。

尙全會の景況に付聊か補記せんに同町毎戸國旗を掲げ歡迎の意を表せり參會者中には安念、渡邊、小幡、荒木の四縣會議員郡會并に各町村等無慮數十名なりしと●久我侯爵には縣會議員小幡直次氏方に休息させられたり●休息所并に會場の體裁は頗る優雅にして莊嚴を極めたり●本會合に就き尤も盡力せしは遠藤、小幡の兩幹事并に評議員、中島中、高島幸吉、五島友次郎、館田豊太郎、佐藤虎一郎、高橋傳治、小杉彦七郎、遠藤庄平、小野田甚四郎、小幡津右工門、野倉安太郎、佐藤策、根尾晋等の諸氏なりと云ふ、盛會想ふへし。

西礪波各宗佛教徒同盟會發會式

越中西礪波郡各宗佛教徒の組織にかゝる同會は愈々去月十八日を以て發會式を舉行せられたり式場は同郡石動町なる道林寺の本堂を以て之れに充て先づ各宗僧侶の勤行(東方偈讚誦)あり終つて松永秀明氏は教育に關する勸語を捧讀し次に中村善應師開會の辭を述べ失れより齋藤芳崑、皆月操、佐々木法順、大矢四郎兵衛、宮崎宣政等諸氏の祝詞演説あり最後に釋雲照律師は儒佛

神三道一貫を以て古來我國道徳の標準となしたることより説起し維新前後に及びて大に之が廢退を來たしたる原因に論及し今日に至り尙ほ未だ之を挽回する能はざるを慨して大に聽衆の思想を喚起したり右終つて全師の音頭にて、天皇皇后兩陛下の萬歳を三唱して閉式を告げたるが當日の來會者は無慮一千有餘名にして満堂殆ど立錫の餘地なかりき又閉式後引續き同寺に於て茶話會を開きたるが出席者は郡内知名の士二百二十名にして吉野維文氏開會を告げ次に律師は「眞如と學術の關係」を演説に就き一場の講話を爲し尙ほ其他二三の講話ありて退散を告げたるが當日は發會式餘興として絶へず煙花を打揚げ非常の盛會なりしといふ

高岡市の集會

去月廿日高岡市に於ける、中越各宗協會發起者總會を開きしに、會者三十餘名、各宗より假幹事、評議員選出等に付協議を凝らし、本月下旬發會式を舉行するに決せりと云ふ

加賀

●北礪波佛教青年會例會 同會にては去月十九日の大谷派金澤別院に於て講話例會を開きたるが釋雲照律師は先づ故會員中川久太郎、太津胖二氏の爲めに嚴肅に讀經廻向あり夫れより同律師の隨行員なる宮崎晴淵氏は開會の主意に併せて佛教の眞理を縷々演説する處あり次で雲照律師は別に演説を

掲げずして奪取し先づ佛前に三拜して開經一卷を讀み夫より我國家が近來智識の進歩したると同時に道德の衰廢したるを歎し之が挽回を計るには是非其各學校へ對して佛教を流布するにありとて己が實見したる事例を一々證を擧げて頗る熱心に演説したるが痛快 語氣當年七十三歳の高齡者とは思はれず傍聴人一同も水を打たる如く尤も靜肅に聴聞したり次に大谷派の名古屋第三師團布教使岩佐大導師は佛敎信者の心得方を説き終りて後律師には會員諸子の乞に任せ佛敎の信仰すべき理由及び其結果に就て尙ほ數百言を費し之れにて一先づ散會となりたるが律師には更に別席に於て當地の各文武高等官等を招集し法話ありたる後各自の質問に答ふる處ありたる由尤も當日は會員一同擧げて出席せし外傍聴人等無慮千有餘名にして左しにも廣き別院大廣間も人を以て充ち満ちたりといふ

尾張

◎尾張佛敎徒同盟會 是同國海西郡有志諸士の組織にたり、去る四月大谷勝珍師に聘し、盛んなる發會式を舉行し爾後益々盛會に趣くよし、今其趣意書并に綱領等を得たれば左にかゝる。

佛敎徒同盟會主意書

佛敎徒同盟會を組織するに當り我地方に佛敎團體なきを憂ひ抑邪家の現象を觀るに教海多事の今日にして我地方に佛敎團體を組織する有志相謀り去日佛敎徒懇話會を開設し話題第一條(地方佛敎團體を組織する事)を議するに滿場一致の協賛を経て茲に佛敎徒團體を組織するの好果を得たり嗚呼愛國護法の志士奮起加盟して本會の目的を達せしめ

本會 綱領
一本會は佛敎同盟會と稱す、二本會は各宗佛敎徒を以て組織す、三本會は愛國護法を以て目的とす、四右の目的を達せんか爲め事業の方針を

法主の發意なるにも拘らず之れを削減せるを以て見れば、彼議員等は唯々諾々様々に由て蒞蘆を畫くの徒のあらずして、皆責任を負ひて、鄂々の議を呈せしと覺ゆ、頼もしき哉、餘りに成功を急がずして徐るに、所謂地を固く踏みつゝ歩を進めん事を希望す、今同會の趣意書を左に示さん

凡佛敎を弘通し世間を饒益せんを欲する者は慈善の事業を振興するより急なるはなし經に曰く佛心者大慈悲是以無緣攝諸衆生と慈悲とは苦を抜き樂を興ふるの謂なり而して苦樂は身心内外に亘る内心無形の苦を抜き樂を興ふるは轉迷開悟の法門なり外相有形の苦を抜き樂を興ふるは濟貧療病の福なり昔者聖德太子佛敎を紹隆し給ふや敬田悲田療病施藥の四院を創立し名て四天王寺と曰ふ敬田は内心無形の快樂を興ふるの道場にて他の三院は皆外相有形の困苦を抜くの處なり爾來各宗の碩徳出世得脱の法門を弘通すると共に濟世救民の方法を開闡する殆其揆を一にせり本宗談する處の俗語は王法を本とし仁義を先とす人たるもの五倫の道を正くすべし録家孤獨廢疾の者をあはれむべきと明治初年の令するところ恭儉已を博愛樂に及すは教旨

聖勅の宣べたまふところ吾宗風に仁義倫道の守るべきを教ふ善善博愛の行ふべきを慮るへけんや殊に文明の進歩人智の發達するに従ひ優勝劣敗の數の免れざる處にして貧富の懸隔益甚し泰西諸國既に其弊に堪へず肥馬輕裘の富者の背後には襤褸飢饉の貧者あり前者の豪奢と後者の欲淡と遂に衝突して社會を擾亂し妄論を生じ暴行を企て遂に國家の安寧を妨げ不測の禍害を醸すに至る是に於て乎政治上種々救済の方策を施すに拘らず宗教家は慈善博愛の主義を以て之を救ふに汲々たり我邦貧富の隔絶未だ泰西の如く甚きに至らざる雖も氣運の向ふ所漸く將に泰西の流弊に陥らんことを慮近因徒の年を逐ふて増加するが如き犯者の再三にして改めざるが如き大率貧困にして活路を得ざるにより習慣性を成す者多きに居る吾佛敎者宜く慈善博愛の本旨により大聲疾呼して之が救済の道を計り社會の安寧を保ち國家の政治を翼賛すべし豈佛敎坐視宗教の弊を厚むべけんや既往福災を救助するが如き免因を保護するが如き若手せざるに非ずと雖規模大ならず常に階級の嘆あり故に今汎く全國の有志を募り一大慈善會を創立し事々金庫に普及し資本を永遠に蓄積し全國の佛敎の本旨を發揚し一は國家の福祉を增進せんこと目的頗る大なるを以て成功亦易とせず愛國護法の諸士同心戮力を以て賛成する所あらんとを庶幾ふこと云

◎各宗管長會議 先頃來京都に於て、各宗管長委員等が臨時集會し、何か密々協議を凝しつゝ、ありしが何を議せし

定むる左の如し、(ア)佛敎を公認教たらしむる事、(イ)適當の地方を選び毎年三、六、九、十二月の四回佛敎演説及説教を開演する事、(ウ)時事問題を研究し慈善的の事業を興す事、(エ)主義を全する他の佛敎團體と氣脈を通し一致の運動を爲す事、五本會は佛敎各宗の合同し勿論宗制上我國體に衝突せざる宗派は相提携し佛敎擴張及社會の改善を謀らん事を期す

三河

◎三河敎界の近況 護法會にて去五月十三日より六月七日迄、平松理英師并に村上流清師をして各地に巡回せしめ、政敎問題等に付演説會を開き到處頗る盛會なりしと云ふ、又本月二日碧海郡矢作町勝蓮寺に於て同盟會の發會式を舉行し尙、來十四日頭安城明法寺に於ても同じく發會式を舉行せんと目下奔走中のよし、兩會何れも四五百名の會員を有し本部と目的を全くし一致の運動を志す由、

寄附金

富山縣西礪波佛敎徒全盟會
右本會に御寄附相成候段謹て厚意を謝し奉候也

佛敎慈善會財團

同會は前號にも記せし如く、本願寺派老法主の發起に掛り、基本金千萬元十年の繼續事業とする目論見なりし、其後同派集會の修正にて、基本金五百萬元七ヶ年の繼續事業に改められたり、余輩は其基本金額の減殺せられたるを惜むと雖も、又一方より考ふれば、活用次第にせられたるも十分なるべし、又始めより危みながら過大の事業に着手せんより、寧ろ少しく内輪に見積り大丈夫の見込の付く範圍に於て實行せん事、却て得策なるべし、且や大

か固より余輩の知る所にあらずと雖も、或は西派本願寺は各宗と衝突したりと傳へ、或は然らずと取消すあり、兎にも角にも、宗教法制定佛敎特待等の相談の有りしならんとは時節柄何人にも察し得らるゝ所なり、或は各宗派聯合事務所を東西兩京に設置して、各宗派共通の利害に關する事件は凡べて此事務所に於て、討議決定すべき事を議せりなむ、いふ、是亦可あり、往年の各宗協會の如くなり終らざるは幸甚、つまり同會議の結果として、本願寺派法主始め七管長七委員は此頃ぞろ／＼上京せられたれば、漸く世の耳目を惹くに至れり、政府も苦心しつゝありといふ、要するに政府たるもの從前の如く宗教を玩弄物視せずして、眞實國家の爲を以て、宗教に對する態度を斷然明瞭ならしめざるべからず、

◎大谷光尊伯の陞爵運動 近來西本願寺法主が屢東上せらるゝは、同法主發起の大事業たる佛敎慈善會財團の件に關してあるべし、吾人は然く確信す、然るに耳を驚かすの飛報は西天より舞ひ來れり

本願寺法主の侯爵運動 本派本願寺一部の從僧は近來法王光尊師をして侯爵に陞叙せしめんと運動を企て居れりといふ今其事實を明かにせざればも往年伯爵運動の關係よりすれば或は眞ならんか而して今回の運動は伊東已代治男專ら之に當る筈なりと

此報果して信か非か、吾人は臆測を止めて暫く事實を假定し見て見んか、天下の醜事擧げん之れに過ぐるものあらんや、抑官位勳爵等を運動請求するは、世の俗士も猶之、恥づる所な

り、彼政黨内閣とて隈板兩伯並び立てる當時自進兩派の末社等が都官運動には世人一般に苦々しく感せし事あり、然るに三界の大導師なる本願寺法主にして、俗士も猶且屑とせざる甲劣極る運動あるとせば、豈慨歎の至ならずや、先年眞宗五派管長が受爵せられしや、吾人は大に齒痒き心地に堪へざりしは、如何に本意無く感せられけんぞ今猶同情を表して同法主の雅懷を欣慕する所なり、然るに忽ち聞く光尊上人が侯爵請求の運動に東上せられしなるは風説のみにて、心有る者は不快の感に打たる所なり、今や同上人は佛教慈善會を發起して、普く徳澤を海内五千万衆に施し、眞個の活如來として、貴賤上下に拜せられんとする千歳不磨の天爵を受けんとしつゝあるに、何を苦んで區々たる人爵を得んとは望まざりぞ、假に純然たる眼俗を以て見るも伯が侯爵を望む理由、焉くにか存する、全体本願寺なる者は何爵を受くべき價直ありや別論として、去る明治二十九年に日清戦争後授爵せられて以來、本願寺なる者何等の貢獻を社會に向て呈せしか、護持會金の増殖が、法嗣殿下の清國漫遊が、佛教慈善會の發起が、前二者の取るに足らざるは論なし、第三者と雖も猶未議を發せしに止りて、寸分の奏功せしむらさず、要するに何れの點より考ふるも斯る運動あるべき筈萬々有ることなし、斯る報知必す其誤あらんことを信じ且祈る

●新女大學

未だ其一班を見たるに過ぎずと雖も、早既には是非の評論噴々たり、流石は三田翁、明治の偉人思想界

●新聞紙の品位

萬朝報の如きは何程勢力ありとも、又何れ多くの紙數を發行すとも、彼は力めて社會の裡面を暴露し、暗黒い方面を描きて、巧に人情の弱點に乘去、萬朝報は好む者固より之を讀み、惡む者讀まざるべからずと誇稱する者、吾人の如く力めて社會の善美を觀察し發揚せんと欲する者と、は正反對の見地に住する者なれば之を措く、當代の大教育家、三田の聖人とまで崇敬せらるる、福澤翁の監督の上に成立てる時事新報の如きも、御茶の水に慘殺婦人ありたりといへば、一號活字を以て之を報し、多額の懸賞を爲すのみならず、其事に關する報導は細大漏さず記載するにも拘らず、善行美事ありて監製章線章等を受くる者あるも、唯僅かに六號活字位にて住所姓名を記し、何々の際にて今回何々賞を受けたりやと報するのみ、吾人は如何なる記事が如何に新聞紙の賣高に影響するや、其邊商賣上の掛引には不案内なれども、苟も社會の木鐸を以て自任する新聞紙の所業としては、ナト受取にくく感せらるるなり、時事新報尙然り、其他は推して知るべきのみ、近來又各新聞紙の句調を見るに、唯無責任の冷かし文句のみ多きは其品位を損する事甚しといふへし、見よ末松男か青森に於ける、三浦子か新潟縣に於ける遭難を、斯る際には假令敵味方の間柄なりとも、遭難者を氣の毒に思ひ、暴行者を惡むか人たるべきもの、當然たるべきに、恩怨を有せざる操瓢者か、暴行者を咎めず、遭難者を冷かす如き口調に出づるは歎かばしき至ならずや、

●大學高等學校増設

文部省に於ては八年計畫を立て

の立者たるを失はず、とはいへ、來て見れば聞きしに劣る當士の山世の中の事物は斯の如きもの乎、評番程には無き心地せらる、固より常識に富める翁が注意の筆に成れる一世一代あれば、肯綮に當れる節も多かれど、開は女子に對する議論としての話なり、五號活字の論説としての價なり、若し夫れ之を探て金科玉條とし、佛僧が所依の經典に於けるが如く、儒者か孔孟の書に對するが如く、日夕拜讀拜讀せしめんには未たし、其言辭の卑猥なる、其文章の亂雜なる、如何なる量負目にも見ゆるなるべし、去りながら三田の聖人とて擔ぐ連中も有れば、終了の上は猶再三再四熟讀の上更に言ふあらんか

●新政黨

難産に難産を極めし新政黨も愈々近日結黨式を舉行すへしといふ、今日自進兩黨對峙の間に介立して、荆益を據有し、三分鼎立の策を立つるは難事なりとも、能不偏中立の本議を守り、巧に兩黨の間に取捨斟酌を爲し黨争を緩和するの功あらは幸甚、何れ兎もあれ國民協會の如く選舉干渉の結果偶然發生したる曖昧なる團體に比較し見れば政界一段の進歩たるに相違なし、然れども新政黨にして若し世間に噂せらる、如く徒に藩閥の瓜牙となり、只管御味方を勤め、又は既成の政黨と結託して、徹底其政黨に願使せらるる如くならんには、國民協會にて澤山なり、我帝國民は決して新政黨の必要を認めざるなり、國民より必要を認められぬ程の政黨ならば、其價値知るべきのみ、新政黨たる者思を茲に致さされは骨折損の草臥儲となり了らん

て、大學高等學校を増設する計畫なりと、從て學校及位置に付て諸方の引張風となり、競争頗る甚し、學校の増設はかて教育振興の意味を表はすといふべきなり、最も喜ぶべき現象なり、然れども單に學校の増設のみを以て足れりとするは大なる誤なり、世の中の進歩と共に一層完備せる學校を要するに至れり、かの日清戦役以後は、日本も膨脹的なる形容詞を冠せらるるに至り万端膨大擴張せられざるなし、文部省の如きも、此勢に驅られて運々なからも、計畫を膨大にし、大中小の學校増設の舉ありと雖も、試みに東京帝國大學に就て見よ、其設備は日清戦役の前後に付て判別し得らるる、其の進歩を來ししにや、講堂病室等は増加せしと雖も、其他に於ては曾て認め得べき程の進歩は未だ見えざるにあらすや、殊に大學院の規定の如きは屢々改正の呼聲はあれども、毎々風説のみにて立消となるにあらすや、學校増設熱に浮かざる、は地方人士に取りは、尤なれども、文部省に於ては學校増設と共に既設學校の設備を完全ならしめん事を瞬時も忘るべからざるなり

●瓜生會發會式狀況

本紙上屢々掲載せる該會は本月十八日を以て發會式を日本橋俱樂部に舉行せり、今其狀況一般を記さんに、正面には至尊の像と、青山善光寺より特に同會に寄せられたる入籠の三尊を安置し、且つ故瓜生君子の肖像を掛けて以て會員の取て進むべき理想なるを表し、莊嚴毫も非すべきなく、此日天候靜穩ありしを以て參會者非常に多く土方龜子、三島和歌子、板垣絹子、岩佐徳子、原禮子

河野關子等の發記夫人は勿論下田歌子、税所篤子、安藤操子、島地八千代子、鳥尾太以子、大草系子、大内文子等の賛成夫人を初め松田、高橋、海江田、松平、石塚、廣田、三宅、朝日、峯、佐和、大澤、山田、成瀬等の夫人令嬢無慮二百五十餘名、樓上樓下肩相摩するに至る又來賓には河野廣中、大槻如電、旭野、藤岡の二文學士等期せずして來會し式に先ちて常盤文學士の挨拶ありて後大内青巖居士は佛前に三歸の式を行はれ一同合掌三拜の後故刀自の生涯を述べて擅那波羅密に及び、後に下田歌子刀自は天爵の貴き事より説き及ぼして現時に於ける智徳の不調和に及び、之に次ぎて遊行上人は刀自の靈前に讀經、德音頌る參集の肝に銘じ最後に南條文雄博士故刀自の自箴の語「自ら責めて他を責めず自ら樂まんとせず先づ他を樂をしめよ」の意味より實行を以て自ら期するの必要を述べられ式終りて土方會頭、三島副會頭の一同に對して親く挨拶ありて散會せり、吾人同會の希望を聞くに悉く會員自己の實行によりて嬌風慈善の實を擧げんとするにありといふ、吾人は偏へに會員各自の誠實心が今後社會慈善等の活動に向てあらはれ來らん事を渴望して已まざるものなり、

録

- 北 東京大神兵長新群栲愛靜山長宮岩青
- 海 京都坂川庫崎瀉馬木知岡梨野城手森
- 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇
- 秋 鳥岡廣和徳高福宮熊
- 田 取山島山島知岡崎本

基督教の傳道事業

余輩は曾て本誌第五號に於て、基督教傳道の教域と題して、其調査を公にし聊か讀者を警醒する所ありき、今復た彼等か傳道事業の現況に就き調査したる所をかゝけ、敢て讀者の一

顧を煩さん。近來基督教徒の意氣銷沈し、傳道の氣息奄々とし甚た衰頹の狀あるも、余輩は決して彼を侮るものにあらず教界の勁敵として彼を待つものなり、彼の萎靡不振なるは彼れ自身の招きたる結果にして自繩を以て首を隘るもの、其愚や憐むべし、彼等はあまり偽善ふるにあり、あまり世間ふるにあり、福音同盟會の如き、貴顯紳士招待會の如き舉動の輕佻、不見識なる此の如し、而も精神上の教育を重する、同志社如何、青山學院如何、頼に秋風落葉の感ありと云ふ、余輩は彼等か既往に於ける傳道事業に顧み、若し彼等か捲土重來の勇氣を鼓し來らば、佛教者は如何なる利器を以て之に當らむとするか、空拳隻手のよく支ふべき所にあらず、今にして悟る所あくんば後日必ず臍を噬むの悔あらむ、左にかゝるものは彼等の各府縣に設立せる學校數なり。

- 北 東京大神兵長新群栲愛靜山長宮岩青
- 海 京都坂川庫崎瀉馬木知岡梨野城手森
- 五 二 九 七 九 五 九 二 一 一 五 一 一 四 五 二 一
- 秋 鳥岡廣和愛福熊宮
- 田 取山島口山媛岡本崎

五 一 八 二 三 一 二 一 三 二

右の表に依りて之を見れば日本帝國内半數に跨りて、間接と直接を問はず、青年子弟の教育に従事するを見る、彼等の傳道事業また勉めたりと謂つべし、翻て佛教學校の狀態を觀察せむか、余輩轉た慨嘆に堪へざるものあり、而して以上の

信 界

靜觀錄

近角常觀

學校は多く何れの宗派に屬するを見むと云。
天主教(二九)、希臘教(三)、日本基(一九)、ユニオン(一)、浸禮教會(四)、ユニテリアン(一)、クリスチアン(四)、グツチレフ(一)、ベルマンレ(二)、美以教會(二五)、日本聖公會(十)、其他所屬の不明なるもの二十以上あり、更に府縣別により、其學校の教師に就て調査したるに、大略左の如し

- 北 東京大神兵長新群栲愛靜山長宮岩青
- 海 京都坂川庫崎瀉馬木知岡梨野城手森
- 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇
- 秋 鳥岡廣和徳高福宮熊
- 田 取山島山島知岡崎本

此等の教師を再び其宗派に依て區別すれば(男女の區別)天主教(一四〇)、希臘教(三七)、日本基(八八)、ユニオン(七)、浸禮教會(二六)、ユニテリアン(一一)、クリスチアン(三七)、グツチレフ(一四)、ベルマンレ(二五)、美以教會(二二〇)、日本聖公會(七一)、(外に未詳者百五十名餘あり)、

教師の數殆ど一千名に充たんとす、佛教者果して何の顔色かある彼等の傳道事業に従事する日尙淺にも關せず若々として歩武を進め、根據を築かむとす、基督教現在の狀態を以て、將來與み易しとなし、枕を高くして安眠を貪るべけむや、敢

(十)宗教心は最健全なる常識に外ならず
宗教心と云ふは、常識に外なる精神作用であるかの如く考ふる習慣がある、これが抑根本的に誤謬である、故に信仰と云ふときは、世人に忽ち常規を逸したるものと考へて居る、何か神靈ある寧ろ奇怪なる精神現象であると豫定して居る、所謂廓然大悟とか、信心回向とか、インスピレーションとか云へる、言語には自ら言ふべからざる高尚の精神状態であることを顯はすと共に常識を以て測るべからざる精神状態であるといふ思想を運んで來る、特に燃ゆるが如き信仰とか、狂氣の如き熱情と云へば、寧ろ常識に外でなくてはならぬと云ふことは、信仰状態の一要件であるかの如く考へらるゝ、故に熱心に信仰を求むるときは、通常では満足出來ぬ、出來るものならば不思議な目に遇ふてみたい、奇蹟でも夢みたいと云ふ様な妄想を抱く様にある夫故世人は所謂宗教心を以て病的であると云ふ様になるが、當に世人が云ふのみでなく、信者自身も病的の如き状態に陥らざれば、宗教意識と云はれぬもの考へてくる、畢竟精神を一點に集注して、他を顧みず、狂氣の如く、炎の如くなら

されば、眞實の信仰とは云はれぬと考ふる、之を要するに常識を離れたるものならざるべからずと考ふる様にあり、果して信仰が此の如きものならば頗る不健全なものである、私は考ふるに宗教心なるものは此の如き奇怪なものではない、寧ろ、最も健全なる常識に外ならぬと考ふる、全体宗教を以て神聖なるものと考ふるはよけれども、其極度に人間の企て及ぶべからざるもの様に考ふるは非常なる過失である、若し果して人間の企て及ぶべからざるものならば、夫は宗教ではない、抑々既に宗教と云へば佛と人との融和を意味するのである、既に佛と人との融和なれば、人として其常識に訴へ人として其性質に叶ひたるものではなくてはならぬ、若し常識を逸し常識を脱するものならば、其は吾人人生界の上に存する宗教とは名づけられぬ、若し常識を逸したるときは或は超絶的であるとも考ふることも出来る然れども其超絶なるものが人間と云へるものを標準として考ふるときは、常人として其性質を逸したるものにして、所謂病的と云はねばならぬ、私は考ふるに宗教は人間の人間たる眞髓を顯はしたるものである、隨て所謂宗教心なるものは、吾人の常識が最も健全に發達したるものである、即ち各自其宗教意識を自省してみれば、假令如何なる様子を顯はれて居ても、決して常識を脱するものでない、寧ろ常識として最も健全なるものにして、宗教心なるものは模範的の常識である、隨て宗教なるものは模範的の人間界を顯はしたるものである、常規を逸したるが宗教の一要件にあらずして、寧ろ常規を逸せぬと云ふことが一要件

である、是が人間として佛陀に融合したる味である、然に宗教上に於て開宗者の傳記を見れば殆ど常識己外の事蹟が現れて居る、釋尊が老病死をみて非常の感と起れ、儲位にありて夜に乘して、王宮を遁れ山に入れたるが如き如何にも常識を以て想像すべからざる事である、ルーテルが野外を徜徉して突然同行の友人が電光の爲に打たれる時、天の起せる恐怖により、法科大學在學中であり乍ら、早速寺院に入りて僧侶となり非常な憂鬱に沈んで懺悔を事としたるが如き、決して通常でないされど此等は何れ最も眞摯なる行爲にして、即自己が感したるとき、忽ち行爲にあらはれて、其間一髪を容るゝの余地がないのである、而して釋尊が所謂十二年の間諸種の宗教的經驗を重ねられたる間、其心中は頗る苦悶されたのとも見える、其精神界の煩悶の様子は是亦確かに常識を以て推すべからざる有様である、釋尊と阿羅漢と問答の時、阿羅漢が哲學的論議を弄して、釋尊に對して抗辯的態度をとりたるるとき、釋尊は答へらるゝには、我は我心中の苦惱を解脱せんが爲めに遠く來りて教を請ふのである、恰も病人の醫治を求むる如く切なるものかあるのである、左様な戲論をなすためでないで、即座に袖を振て去られた實に信仰の問題につきて議論的態度をとるものゝためには拳々服膺すべき訓誡である、借此苦悶の最後に遂に精神的の妄想即惡魔を勦絶して所謂廓然大悟の樂境に達せられたるのである、此安心の地に達せんとする前驅として、非常な精神上の苦悶がある、之を若し平生態々閑々として、戲論をなして、吞氣にして居るものゝ目より

みるときは如何にも狂氣の如くみるのである、常識を逸したる行動の如くみゆるのである、此苦悶が中々通常でないである、釋尊が自ら病者か醫治を求むる如く形容されたは如何にも適切なる形容であるされど全く是眞摯なる人ならばかくあらざるべからざる道理にして、所謂頭燃を拂ふが如く一刻も猶豫する餘裕がある筈がない、されど決して常規を逸したる意識ではない、殊に宗教心と稱すべき點は此煩悶の心でない、此煩悶を脱し來りて後、從容迫らざる廣廓なる精神界である、此境に至りて其胸中に起れる宗教意識なるものは、毫も常識と異なるものでない、寧ろ最も健全なる常識にして、人間意識の標本とでも稱すべきものである。

佛陀の寛大なる、慈悲深き心か一人感せらるゝ、即ち感謝の念か起る、感謝の念か起りてみれば安閑として居られぬ、出來る水同胞の爲には盡さねばならぬ、宗教の爲め盡さぬはならぬと云ふ心になりて眞劍になる、所が中々心に思ふばかりに實際は盡されぬ、少々位は善をなしても實際は爲したと稱する程のことではないのである、此の如き心か私の現今宗教意識の有様である、頗る微弱なるものであるが、自己の惡を惡と自覺することが出來、自己の善を善と思ふ心の少くなつたは只事でないと考へてゐる、細々ながらも慚愧と感謝と日送りが出來る、而して此等の心か毫も常識を逸したと感ぜぬ、私は凡半ヶ年已上も病の爲めに精神上に苦悶を感じたことかあつたが現時の宗教心には當時の如き狂熱的分子は毫もない、とにかく健全なる常識であるを考へる

併此苦悶の時の意識につきては大に注意すべきである、動もすれば殆んど意識己外に逸したるかの如くみえる人があつた、マホメットやスウフィーデンホルグの如きは頗る怪しい、今日にても宗教熱心より遂に罪惡思想に陥り、或は種々の迷信を抱く人があつた、是最も注意すべき點である、此苦悶の時常識を逸してはならぬ、既に此苦悶の時常識を逸せずして、治ひ上げたるものゆへ、其結果は健全なる常識としてあらはれるのである各自其經驗に徴して省みるがよい、私は最も嬉しいのは、自分の缺點あることを自覺する意識を生ずる様になつたことである、而して中に得意になることあるも、忽ち自己の缺點か頭を擡げ來るがために、高慢の心を碎かるゝ、此に於て自ら慚愧の心が起り、他人の缺點は左程に目につかぬ、殊に自己の怠慢なる、自己の冷刻なることを感すれば、

俗諦とか稱することありて、世人が道德心と宗教心とは異なる意識である如く考ふる人があつた、是は大なる誤りである、私か考へるには唯一の健全なる常識であつて、人と人との間柄なれば道德心と名け、人と佛との間柄なれば宗教心と名くる迄の事である、佛に對して懺悔する人が他人に對して高慢になり、佛に對して感謝する人が、他人に對して感謝の念のない筈はない、之を別物の如く考ふる人は、抑々宗教心を以て常識己外のことの様に思ふて居るは過失である。

尾張の慈善家岩井利右衛門翁

尾張の慈善家岩井利右衛門翁 (承前完結) 本多 藤里

●施し上手。翁は翁を極めて能く知る人の評なり、これ翁は、終始注意し観察して、時と場合と人を見定めて、救助するを以て、其施與必ず無益に終らずして、必ず奏功するを云へるなり、翁の施を受けたる者は、情者も勉強心を生ずるは妙なり、これ翁が天稟の徳にして、常人の學んで得べからざる所なり

●翁の宗教心。教は所謂御有り難屋にあらず、球數瓜縁り念佛を稱ふるなどは其好む所にあらず、去れども窮者を憐むの情深くして、只救助を樂む者、即大慈悲の佛心にして菩薩行なり、去れば翁の過ぐる所は貧民集り來りて渴仰拜跪する様、眞個に菩薩の化身かと思はしむ、且や其慈善施與を行ふは通常、祖父、兩親、姉の忌日を以て追善供養を兼ねて行ふ、又町中に成信坊といふ大寺あり、此寺の説教日には多く訪問して寺僧と談するを殊の外に喜ぶなり、

●彰善會旌表式。徳孤ならず、翁の善行は何日しか東京ある彰善會本部に開け、同會より津島町に出張して、翁の旌表式を行ふ事に決し、昨三十一年十月二日津島町尋常小學校に於て舉行せらる、此日臨席せる者は、高崎彰善會會長、徳川侯爵以下、數百名に上り、

廣 告

眞宗豫約出版廣告

●島地默雷師 南條文雄師題辭
●大内青樹居士 千河岸櫻所居士序文
●土屋詮教師著

眞宗通鑑 全一冊

●眞宗通鑑は眞宗弘布の供資にせん爲簡易明晰に眞宗信者の知るべき事及未信者を導くに必要なる旨を網羅せること左の略目次の如く、且つ振假名を施し見出を設け聖教中の金言を引用せり
●第一編各宗總説(宗教總論、萬國諸宗) 第二編佛教總説(通佛教史、佛教各宗) 第三編眞宗史(眞宗通史、釋尊傳、聖德皇傳、七高僧傳、宗祖大師、各派傳燈) 第四編眞宗教義(經典、名義、判釋、教旨) 第五編道德儀式(道德の原理、已れに對する道德、他に對する道德、儀式及繩素心得) 第六編眞宗地理(佛敎諸國、眞宗舊跡地) 以上六編拾遺

豫約

●豫約金三十五錢 ●郵税六錢 ●豫約申込期限七月十五日迄 ●出版期七月廿五日 ●爲替振込局(東京駒込支局宛) ●郵券代用一割増 ●前金に非ざれば豫約に應せず ●十部以上割引 ●豫約期限後は正價に復す ●豫約金受領せは直に受領證を差出す

豫約申込所

發行所 東京本郷區西片町十番地 興教書院 賣捌 京都下京區油小路通御前通上

歎と、佐竹氏も頼には答へず、四方八方の話の中に、翁は曰く、斯る旌表式などに金錢を費すは惜いものせず、私も今度袴を求めた、色々の費用を合せは随分多くの貧民を救ひ得べきにと、佐竹氏手を拍て曰く、其一言以て答辭に恰適す、宜しく其通言を言はるへしと、遂に答辭決す、

●頌徳表と祝辭。旌表式當日朗讀せられし、高崎會長の頌表及徳川侯爵の祝辭は、簡にしも而も翁の一世を盡せり、今紹介すへし

●徳孤ならず。翁が徳行の稱すべきは既に見る所の如し、尾張に於ける彰善會員林陸夫氏等大に盡力して、遂に同會長高崎男も臨みて旌表式を擧げられし事なるが、同地方にては慈善の行はさるべからざるを感じ、又彰善會の趣意を賛し、望みて同會に加入せるもの今や數百人の多きに達し、國別を以て同會議を別ては尾張は最多數を占む、之れ蓋し翁の徳に自然に化せられたるもの多しといふべし、翁の嘉行は未だ之れに盡さずと雖も今は擧筆するにあらん、

●頌徳表。岩井利右衛門翁の心節し難き飲食を節し、堪へ難き衣住に堪へ日々無月々に積み、運命を致してしむるの富を私せず、翁の者二典ふるをうへ善きたのしみとせり、それ國家に對してその身を家事を顧るにいさ無き軍人なり、その家族を窮せしむるは忍びざる所なりとて、氏は厚く之を扶助せり、幼童は未來の國民なり、貧窮なるの爲に學に就くこと能はず智識なくして成長せしむるは國家の大害なりとて氏は厚くこれを扶助せり、水旱疾病もしくは業務の失敗によりて貧苦に陥りたる者は實におはれむべし、傍觀せんは同胞の情にあらずとて、氏は厚くこれを扶助せり、是等扶助を與ふるべきの氏を風采を見るに輪七旬に垂むとし、眼病にさくがれる身を以て綿衣を穿ち木屐を踏み雨にぬれ風に倒れむとしつゝも、毫も倦厭の色なし嗚呼善を爲す最樂しとて古人既にいびだれど、之を一心とするもの稀なる世に、獨善の如きを得、いかにか敬愛せざるを得むを以て本會は規則第九條に據り、其名を善行名譽録に載せ、更に評議員の議決を経て特にこの状を贈る

明治三十一年十二月二日 彰善會長從三位勳一等男高崎正風 侯爵 徳川 義禮

轉居 本多辰次郎

東京市本郷區駒込達達菜町七番地

政教時報第十二號目次

- 社説 貧民教育
論説 慈善に就きて
社會報 各地の運動
社會 本願寺派の慈善事業外數件
雜錄 殖民に對する宗教の必要(完)
信界 靜觀録(九) 詩的信仰は一種の懈慢界
今昔 尾張の慈善家岩井利右衛門翁

本誌廣告

- 一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應せず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
一、本誌定價左の如し

Table with subscription rates: 一部 一ヶ月 六ヶ月 一年, 金貳錢五厘 金五錢 金參拾錢 金六拾錢, 無遞送料

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

第八回佛教夏期講習會開設豫告

佛天の冥祐と有志諸彦の贊助とに依り、毎年、夏期、名勝の地をトシ講習會を開設し各々、力を心性の涵養に盡し普く、佛陀の德音を江湖に傳ふることを既に七回實に左の如し

- 第一回 攝州須磨浦 第二回 東部鎌倉、西部二見浦 第三回 三州蒲郡町 第四回 相州三崎町
- 第五回 遠州新居町 第六回 東部陸前國松島、西部播州明石 第七回 尾州常滑町

茲に本年其**第八回**を越前國敦賀港に開かひとす、今や教界益々多事苟も吾人青年たるもの深く精神の修養に勉め、相互の團結を鞏固にせざるべからず、殊に越前若狹の有志諸氏本會を待つこと頗る切にして、今や準備既に成り同港海濱に於ける**萬象閣**を以て**會堂**に充て坐して天空海潤の壯觀を縱にせしむ、又諸講師の出演を諾せらるゝこと、本年の如く**整頓**せる鮮し、且つ本年は所定の**講筵**已外に特に講師に請ひ、**靜座**若くは**信仰**

經驗談話會を設け、力を内的修養に須る、時々**茶話會**を開き眼中宗派の區別を没し、胸裡學校の城府を設けず、平等一致、相互の氣脈を通し共に護法の大策を講せんとす。夫れ**敦賀**の地四通八達東西及北陸の要路に當る希くは四方の同胞諸士奮ひ來りて共に清涼の德風に沐し微妙の法水に浴せよ謹て豫告す

●**講師** 橋本峨山師、西有樓山師、大内青巒居士、奥田貫昭師、脇田堯淳師、加藤行海師、南條文雄師、村上專精師、黒田眞洞師、釋宗演師、島地默雷師、森田悟師、守本文靜師、(いろは順) ●**會場** 越前國敦賀 ●**會期** 七月二十二日(二)より同 ●**止宿費** 一日十八 ●**教**

●**育講習** 本會に附帶して教育講習會を開き、教育、倫理、心理、歴史、國史、國文、漢 ●**順路** 第一 東京よりする ●**來會申込所** 東京米原停車場にて北陸線へ乗換へ、敦賀停車場(尤も午後六時發の急行を便、す) ●**來會申込所** 東京五拾錢 第二 京都よりする者は、七條停車場、米原停車場を経て敦賀停車場 ●**來會申込所** 東京本郷區森川町一番地大日本佛教青年會事務所、京都花園妙心寺學林賣山良雄、越前國敦賀町大島妙顯寺夏期講習會準備事務所

明治三十一年六月

東京帝國大學第一高等學校德風會、東京專門學校校友會、哲學部宗教學會、慶應義塾佛教會、第二高等學校道交會、第四高等學校支部、第一高等學校學友會、愛知帝國大學支那、曹洞宗大學、淨土宗高等學院、眞言宗古羽、學林、眞言宗高等普通學院、日蓮宗大學、佛教講習院、眞言宗大學、關西佛教青年會、京師帝國大學、眞宗大學、眞宗大學、妙心寺學林、文學部、眞宗京都中學校、眞宗第一中學校、京都府醫學學校、淨土宗京都中學校、佛光山、院、北陸佛青年第四高等學校、金澤第一中學校、金澤師範學校、金澤工業學校、眞宗金澤中學、曹洞宗金澤中學、大日本佛教青年會熊本支部、第五高等學校、熊本縣中學校、東京師範、西中學寮等、諸學校有志

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

東京市本郷森川町一番地 發行兼編輯人 上村幸三郎 印刷人 清水朝太郎